かがやき

── 令和４年度　差別の解消をめざすことをテーマとした人権作品集 ──

第20集

千　曲　市

千　曲　市　教　育　委　員　会

はじめに

人権教育は、差別や偏見をなくし、お互いの人権を尊重する意欲と実践力を持った人間を育て、すべての人間が「自由・平等」で幸せに生きられる社会の実現をめざすための礎（いしずえ）です。その実現のためには、人それぞれの違いを認め合い、よさを見つけ合い、優しさを与え合って生きていくことが大切です。

千曲市では、「千曲市差別撤廃人権擁護条例」、「人権とくらしに関する総合計画」および「千曲市部落差別の解消に関する啓発及び教育等基本方針」に基づき、あらゆる差別のない人権尊重のまちづくり施策の一環として、人権教育の推進を図っており、今後もより一層の充実が求められています。

こうした中、人権についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的として、市内小中学校の児童生徒の皆さんに差別の解消をめざすことをテーマとした標語・作文・ポスターを募集したところ、人権学習の成果がうかがえる作品を数多く応募いただきました。

本書「かがやき」は、その中から選考し入選となりました作品を掲載した作品集で、このたび第二十集の節目を迎える運びとなりました。多くの方々に本書を手に取っていただき、作品を通して今後の学校での学習並びに日常での人権啓発活動に活用していただければ幸いです。

おわりに、すばらしい作品をお寄せいただいた児童生徒の皆さん、ご指導や審査にあたられた先生方に、厚くお礼申し上げます。

令和五年三月

千曲市・千曲市教育委員会

はじめに

◆標語（小学生）……1
◆ポスター

小学生の部

【優秀作品】

東小学校　五年　小林　楓奈……3
東小学校　五年　西澤　もな……3
東小学校　五年　西村　紗英……4
埴生小学校　五年　市川　華桜……4
埴生小学校　五年　鈴木　音桜……4
八幡小学校　六年　小川　大空……5
八幡小学校　六年　宮澤　奏音……5
更級小学校　五年　大谷　夏月……5
五加小学校　六年　帯川　康希……6

【佳作作品】

屋代小学校　五年　小山　聖奈……7
屋代小学校　五年　返町　瑠生斗……7
屋代小学校　五年　和田　佳那子……8
埴生小学校　五年　吉原　櫻……8
治田小学校　五年　市川　ちゆ……9
五加小学校　六年　柏原　光……9
五加小学校　六年　南澤　あい美……10
五加小学校　五年　西澤　優仁……10
上山田小学校　五年　若林　遼芽……10

中学生の部

【優秀作品】

屋代中学校　一年　半田　和香菜……11

【佳作作品】

屋代中学校　一年　久保田　宗茂……11

◆作文

小学生の部

【最優秀作品】
五加小学校　六年　神谷　芽生……12

【優秀作品】
屋代小学校　六年　髙木　結衣……13
埴生小学校　六年　宮沢　凜奈……14
五加小学校　六年　松林　美玖……15
五加小学校　六年　若林　虹羽音……17

【佳作作品】
治田小学校　六年　小林　太陽……18
治田小学校　六年　山本　彩愛……19
戸倉小学校　六年　加藤　優依……20
戸倉小学校　六年　小林　日榎……21

中学生の部

【最優秀作品】
屋代中学校　三年　土屋　奈緒……22

【優秀作品】
屋代中学校　三年　佐藤　胡桃……24
更埴西中学校　三年　鈴木　翔太……25
更埴西中学校　二年　下嵜　彩音……26
戸倉上山田中学校　三年　瀬在　優菜……27

【佳作作品】
屋代中学校　二年　松澤　福実……28
更埴西中学校　一年　中里　莉菜……29
戸倉上山田中学校　三年　伊藤　笑愛……30
戸倉上山田中学校　三年　佐藤　絢菜……31
戸倉上山田中学校　三年　吉松　佑紀乃……32

標語

みつけよう　君と私のいいところ　それだけでほら　未来がかわる
屋代小学校　六年　宮坂　うらら

あいさつで　みんなの心を　ポッカポカ
屋代小学校　五年　村石　彩佳

君と僕　個性は違う　でもいいね
屋代小学校　四年　村田　陽城

楽しいな　仲間がいるから　がんばれる
東小学校　四年　岡田　龍功

運動会　心を一つに　走りだす
東小学校　四年　轟　理希愛

学校は　まちがえたって　いいんだよ
東小学校　四年　灰谷　夏希

なかよしで　さべつをなしに　すごそうよ
埴生小学校　四年　三浦　宇海

知らないうちにしているかもよ。相手がきずつく言葉気をつけよう
埴生小学校　四年　宮坂　美羽

差別をやめよう　人が傷ついたり、悲しくなる　一人一人を大切に
埴生小学校　四年　宮坂　優花

だれにでも、人の権利はあるのです。
治田小学校　四年　北島　愛莉

みんなが楽しい世界を作ろう。差別やいじめのない世界を作ろう。
治田小学校　四年　小林　亮翔

ともだちは　たからものだよ　いじめだめ
治田小学校　四年　神農　音彩

友だちへ　言われてうれしい　言葉言う
八幡小学校　四年　青木　駿也

あいさつで　暗い心も　晴れもよう
八幡小学校　四年　菊池　蓮花

友だちと　相談しよう　いやなこと
八幡小学校　四年　宮下　和空

だれとでも　なかよくしよう　こうへいに
戸倉小学校　四年　大塚　陽斗

こまったら　相談しよう　助け合い
戸倉小学校　四年　松林　幸弥

友達は　みんなの心の　勇者たち
戸倉小学校　四年　宮川　美咲

だれにでも　いいとこいっぱい　見つかるよ
更級小学校　四年　小林　成太郎

どうしたの　そうだんのるよ　無理しない
更級小学校　四年　瀧澤　唯千華

かんがえて　自ぶんのことも　友だちも
更級小学校　四年　若林　希花

すごく辛い　聞いてほしいな　私の気持ち
五加小学校　五年　金井　愛音

差別ダメ　やられた気持ち　考えよう
五加小学校　五年　越石　啓二朗

かわりもの　だれとくらべて　いるのかな
五加小学校　五年　宮入　晃都

差別をなくし　悲しい思いをする人が　一人もいない新時代を作ろう
上山田小学校　六年　清水　颯太

「遊ぼうよ」　今日から僕らは　友達だ
上山田小学校　四年　小林　碧南

ポスター

❖小学生の部❖

優秀作品

東小学校５年

小　林　楓　奈

東小学校５年

西　澤　も　な

東小学校５年

西　村　紗　英

埴生小学校５年

鈴　木　音　桜

埴生小学校５年

市　川　華　桜

八幡小学校６年
宮　澤　奏　音

八幡小学校６年
小　川　大　空

更級小学校５年
大　谷　夏　月

五加小学校６年

帯　川　康　希

佳作作品

屋代小学校５年

小　山　聖　奈

屋代小学校５年

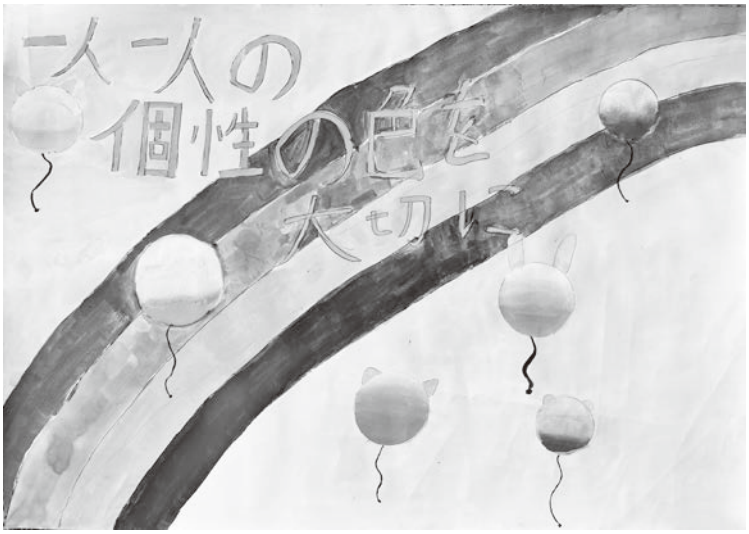
返　町　瑠生斗

屋代小学校５年

和　田　佳那子

埴生小学校５年

吉　原　　櫻



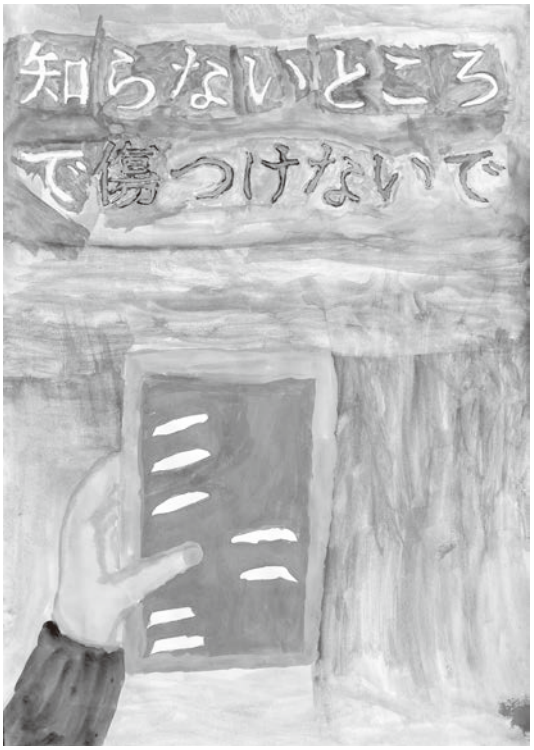
治田小学校５年

市　川　ち　ゆ

五加小学校６年

柏　原　　光

五加小学校６年
南　澤　あい美



上山田小学校５年
若　林　遼　芽

五加小学校５年
西　澤　優　仁

❖中学生の部❖

優秀作品

屋代中学校１年

半　田　和香菜

佳作作品

屋代中学校１年

久保田　宗　茂

作文

❖小学生の部❖

最優秀作品

言葉の力

五加小学校　六年　神谷芽生

わたしは、あることをきっかけに、この言葉を言ったら相手はどう受け取り、どう感じるかについて、言葉を発する前に深く考えるようになりました。

そのあることとは、「あだ名」です。わたしは、あだ名は相手から親しみを込めて言われるものだと思っていました。わたしもあだ名で呼ばれることが多くあります。

わたしのクラスでは、ある子にむかってあだ名を言っていました。そのあだ名は聞いていてちょっと引っかかるような、気分がいいものではありませんでした。でも、そのあだ名で呼ばれている子は、

「何、そのあだ名～。」

と笑っていて、あだ名で呼ばれることが嫌そうな感じには見えませんでした。わたしは「あの子が嫌だとおもっていないなら止めなくて大丈夫か」と、そのままにしていました。そうしてその子はずっとあだ名で呼ばれ続けていました。

ある日、朝の時間に、先生からクラスのみんなに話があると言われ、なんだろうと思っていると、それはあだ名についての話でした。先生はあだ名で呼ばれているその子から、

「あだ名で呼ばれることが嫌だ。」

と相談を受けていたのです。

「あの子は笑っていたけれど、本当はあだ名で呼ばれるのが嫌だったんだ…。」

わたしは今まで、その子があだ名で呼ばれるのが嫌だということに気づいていませんでした。表情では笑っていても、心の中ではずっと嫌だと思っていたのがわからなかったのです。先生の話の内容を聞いて、近くの席の友達が

「すぐに言ってくれればよかったのに。」

と小さく呟いているのが聞こえました。誰かにその気持を伝えられればそれが一番だとわたしも思いますが、その子は、それが不安でできなかったのかもしれません。最初にあだ名で呼び始めた友達は、悪気はなくて遊び半分だったのかもしれませんが、あだ名という言葉一つでこんなに相手を不安にさせてしまうなんて、「言葉の力」の怖さを感じました。そして、最初に

あだ名を言い始めた人達だけでなく、変なあだ名で呼ばれている子がいるのを知っているのに、自分自身も、「嫌がってなさそうだから大丈夫だろう」と、あまり気にしていなかったことを反省しました。

いじめには、「加害者」と「被害者」の他にも、見ているだけの「傍観者」がいます。わたしは今回傍観者側でした。これからもこのようなことはやっぱり起こってしまうかもしれません。その時は、傍観者の人達がただ見ているだけでなく、やめさせようとする行動を起こすことが大切だと思いました。そのような行動を起こせたなら、きっといじめにも繋がっていかないと思います。

そしてわたしは、今回の経験を通して、とても強く思ったことがあります。それは、「言葉の力を正しく使う」ことの大切さです。わたしは、あだ名という言葉一つに相手を不安にさせてしまうほどの大きな力があることを知りました。でも、言葉がそれほどの力を持っているなら、その「言葉の力」を正しく使い、相手を楽しくさせたり、嬉しくさせたりすることができるんじゃないかと考えたからです。

わたし達はこれから、中学校、高校、大学、社会へと進んでいきます。そのなかで、環境もどんどん変化していきます。接する人もいろいろと変わっていくでしょう。でも、どんな環境でも、どんな人に対しても、相手の気持ちをよく考えてから言葉を発し、行動していきたいです

優秀作品

「あだ名について思うこと」

屋代小学校　六年　髙木結衣

私は最近、ネットなどを見ていて「あだ名禁止」という校則があることを知りました。この校則が作られた理由は「いじめなどにつながる恐れがあるから」だそうです。私はこの校則を聞いて、流石にあだ名禁止はひどすぎると思いました。

確かにあだ名はいじめにもつながります。私もそんな話を母から聞きました。母は昔毛深くて、「ムック」というあだ名をつけられてたことがあったそうです。ムックとは、ガチャピン・ムックのムックですが、雪男の子供で、毛むくじゃらという設定があるそうです。その後、母はしばらくムックを見るのも嫌いになったそうですが、これはあだ名の悪い例です。あだ名はこのようにいじめにつながることも無視はできません。

しかし、今の社会に「あだ名禁止」といった感じであだ名を

禁止する校則をつくるのはやりすぎだと思います。理由は、ネットに触れていく上で「ネットは使い方によっては駄目な面もあるが、いい面もある」と習うときに、よく刃物やはさみなどを例に出しますが、それとあだ名は同じだと思うからです。刃物やはさみは、使い方を間違えれば人を傷つけますが、使い方を守れば安全に使えるからです。ネットもこれと同じと言われますが、私はあだ名もこれと同じだと思います。あだ名は場合によっては人を傷つけたり、不登校などにさせたりしますが、使い方のルールさえ守れば仲良くできるからです。あだ名を付ける理由は、「距離を縮めたい」や、「仲良くなりたい」などのことがあるからですが、これをいじめに利用する人もいます。それで禁止されてしまったのでは、ちゃんと人を傷つけないようにルールを守って、あだ名をつけていた人の努力などが水の泡になります。

　では、どのようにルールを守ればいいのか考えました。例えば、私は学校では同じ名前の人がいるので「高木くん」と呼ばれますが私はこれを嫌だと感じたことは一回もありません。むしろ、誰を呼んでいるのか区別がついて、いいと思います。このように、誰を呼んでいるのかわかるようなあだ名をつけるのはいいと思います。それ以外でも、本人に「このあだ名で呼んでもいい？」と直接許可を取れば、それでもいいと思います。駄目な例は、許可を取らずに、嫌なあだ名（見た目をからかうものや、能力をからかうもの）で呼ぶことや、聞いていて嫌なあだ名をつけて呼ぶことです。

　このようなルールが守れる人があだ名を使ってほしいなと思います。私のクラスでは、このようなルールが徹底されているイメージがあります。みんな「ここり」や「りーちゃん」など、本人の名前などに由来するあだ名をつけています。聞いていて嫌なあだ名がつけられているのが無いので、私のクラスはみんながあだ名のルールをしっかり守って、あだ名をつけています。たまに、相手が嫌なあだ名で呼んでしまったとしても、すぐに「ごめん」って謝罪できているところが、私のクラスのいいところだと思います。

　このように、あだ名を禁止するのは流石にやりすぎで、ルールを守った範囲でなら、あだ名を使ってもいいと思います。

差別をなくし誰もが同じ明るい未来へ

埴生小学校　六年　宮　沢　凜　菜

　私は、物語を呼んだり学校で人権の勉強をして、どうやったら差別がない明るい世の中になるのか考えました。

　まず、『村人が無事ならば』や『わたしの道を』のお話のよ

うに生まれた場所などで差別をされてしまう人たちがたくさんいます。他にも肌の色によって差別をされてしまう人たち、障害によって差別をされてしまう人たちがたくさんいます。差別をする側、される側、どうして同じ人間なのに二つに別れてしまうのでしょうか。内面を知らず外見で判断をしてしまう人はきつといると思います。なので私の考えは相手と話したりして、もっと相手のことを知ってほしいと思います。また、外見で判断せずに、内面を知っていても差別をしてしまう人もいると思います。その人がもし、嫌だったと思ったことがあったら影で言わず、その人に直接伝えてあげたらいいと思います。言ってもらって気づくこともあります。なのでお互いが気持ちよく過ごせるように伝えあっていく事が大切だと思います。

また、病気で差別をされてしまう人もいます。『本当のことを知ってください・ハンセン病と差別』では、ハンセン病になってしまった人たちは、社会から差別をされるようになってしまいました。今の時代は、新型コロナウイルスが流行っています。少し前までは新型コロナウイルスに感染してただけで差別をされてしまう人たちがいると聞きました。なので相手の立場を考えることが大切だと思います。もし自分が感染してしまったらどんな気持ちになるのか考えれば差別はなくなると思います。

また、差別をする・しないだけでなく助け合うことも大切だと思いました。私がテレビを観ていると、車いすに乗ったお兄ちゃんを弟たちが学校まで連れて行ってあげていました。でも、そこは危険な通学路でした。けれど協力して弟たちが学校まで連れて行ったら、友だちが校門まで向かいに来てくれました。教室まで車いすに乗ったお兄ちゃんを連れていき、友だちがイスまで運んであげていました。その嬉しそうなお兄ちゃんの顔、協力してくれる友だちの姿、とても素敵で感動してしまいました。みんなで助け合えることができたら、もっとより良い社会になると思いました。

差別のない未来にしていくために、自分のできることを見つけ、困っている人や悩んでいる人がいたら相談にのってあげるなど手を差し伸べることができる人になりたいです。

未来の社会では差別をしている人を見かけたら誰もが注意することができるといいです。また、誰もが幸せな未来であってほしいです。

自分の思いを言葉に

五加小学校　六年　松林美玖

私は、自分の思っていることを口に出して言葉にするのはす

ごく大切なことであり、すごく難しいものでもあると思います。このように私が思うのは、ある出来事があったからです。それは、低学年の頃に友だちと話していて、私があまり理解できていなかったから、友だちが薄く机に書いて説明してくれたことがあります。でも、その後、友だちが机を消しゴムでこすっているのを先生に見られて、友だちは先生に注意されてしまいました。私は、

「本当は、私のせいなのに…」と心で思うことしかできませんでした。なので私は、先生に、

「このことは、私が原因なんです。」と言えたらその友だちだけが注意されることはなかったなと、とても後悔しています。でも、このことがあったからこそ私は、自分の思っていることを口に出して言葉にするのはすごく難しいことだけれど、すごく大切なことだなと思えるようになりました。でも、私は最近になって、新たに考えた事、気づいた事がありました。それは、最近やった道徳の授業「世界人権宣言から学ぼう」で、「自分の意見を言っていい権利があるから、悪口を言っても良い。」という考えに討論をしてください。というようなものがあって、私は、

「自分の意見・思いを言っていい権利があるからといって、なんでも言っていいと思っている人もいるかも…」と思い、改めて思いを口に出して言葉にするというのは難しいなと思いました。そして、自分の思っていることを言うことで、相手を傷つけて、自分も後悔してしまうかもしれないということに気づきました。自分の思っていることを何でもかんでも、言葉にして言っていたら、その言葉の中に相手を傷つけてしまう言葉があるかもしれません。人によって思い方・感じ方は違います。それに、言ってしまうことで、自分でも後悔をしてしまうことになってしまうかもしれないと思いました。

私は、これらの事についてまとめ、考えたことがあります。それは、思っていることや意見を言うのはやはり大切なことだと思います。でも、それを言うときには、相手や自分のことも考えて、誰もが不快な気持ちにならないようにすることが大切だと考えました。なぜなら、思っていることを言うのは大切なことだけれど、何でもかんでも色々思っていることを言ってしまうと、人によっては、不快な気持ちになってしまうこともあるかもしれないから、思っていることを言葉にして言うときには、誰も不快な気持ちにならないで、自分の思っていることをもっと自由に言うことができるようになると思ったからです。

このようにして、自分の思っていることを言葉にすればきっと誰も不快な気持ちにはならないと思うし、自分の思っていることを言えて、周りの人たちと色々話を共有できたりしてすごくいいと私は思うので、『自分の思いを言葉にして言うというのはとても大切だ』という気持ちを忘れないで、生活していけ

たらとても良いと思いました。

思いやる気持ち

五加小学校　六年　若　林　虹羽音

私は、自分に思いやりの気持ちがないと思うことがあります。私の母は心配性で、何かあるとすごく気にかけてくれます。ありがたいけど心配しすぎて少し困ります。そんな母に、

「いつも心配してくれるのはありがたいけど、そんなに心配しなくてもいいのに。」

と言ったら、母から

「そりゃあ、心配するでしょう。自分の子どもなんだから。」

と言われてしまいました。でも、よく考えてみたら、それは「思いやり」だったんだと思い、とても大切なことだと改めて気づきました。それから、「思いやり」がとても大切な言葉だと思うようになりました。そんな「思いやり」について考えさせられるある出来事がありました。

ある日の登校のときのことです。いつものように登校班で歩いていると、一年生が転んでしまいました。私は、今までこんなことはなかったのでとてもとまどってしまい、なかなか自分から動くことができず、その場に突っ立っていました。でも、班長は違いました。すぐ動いていたのです。転んでしまった子に「大丈夫？」や「立てる？」などと声をかけて、その子のランドセルを持ち、手を繋いで一緒に歩き出しました。班長は勇気と思いやりのある、とてもいい人です。なのに私は、すぐに動けず、「この子連れていくから、先行って。お願い。」と班長にたのまれたことだけをやりました。その後、私は今朝のことを考えました。「なんで班長みたいに自分から率先して動けなかったんだろう。私はきっと、勇気も思いやりさえない、最低な人間なんだ」と。何もできなかった自分に、すごく後悔しました。そのことを母に話すと、

「なんで自分から動かなかったの？自分のためだよ。」

と言われて、ちょっとイラッとしたと同時に、悔しいという気持ちでいっぱいになりました。私は、「自分のためだよ」という母の言葉が心に残っています。きっと、私の将来のことを心配して、「こういう事があっても自分でできることはやろう。」と言いたかったのかなと思いました。

思いやりというのは身近にあります。人が嫌がること、喜ぶことなのか、やってはいけないこと、やっていいことなのかを考え、相手の気持ちになって自分から行動することが大切です。

私は、一年生が転んでしまったときから、できるだけ思いや

りを意識して生活しています。「どうしたら班長みたいに勇気と思いやりがある心になれるのかな」や、「私は、班長みたいに自分から率先して動けるのかな」と考えたりもしました。そしてそれには努力が必要だと思いました。だから私は、今までのように、恥ずかしいからといって見て見ぬふりをしたり、自分から動かないで後で後悔したりするのではなく、人の気持ちを考え、勇気を出して自分から動けるようにしたいです。そして、母や班長のように、思いやる気持ちを持ちたいと思います。

佳作作品

「思いやりについて」

治田小学校　六年　小林太陽

ぼくは、思いやりのある人になりたいと思います。辞書で「思いやり」について調べてみました。「相手の立場に立って考え、相手の気持ちを大事にし行動することや、やさしい心づかいをすること。」と書いてありました。思いやりという言葉は、簡単に聞こえるけれど意味は、とても難しいと思います。例えば、相手の立場になって考えるとは、ぼくが良いと思っていた言葉や行動は相手にしては、いやなこともあると思います。ぼくは、相手の立場に立って物ごとをあまり考えたことがなかったです。もし自分が思いやりのある言葉や行動を言われたらうれしいと思います。

以前思いやりのある言葉を言われてうれしかったことがあります。ぼくは、スイミングスクールに通っています。友達がいなく一人でバスに乗り、一人で行動していました。バスの中で違う学校の男の子が「いっしょに話そうよ。」と話しかけてくれました。その時はとてもうれしかったです。ぼくは、知らない子に話しかける勇気がなかったです。男の子は、思いやりと勇気、やさしさがありすごいと思いました。ぼくも相手の立場に立って考えこのような場面があったら話しかけられる人になりたいです。その子のおかげで今でも楽しくスイミングスクールに通えています。

これからぼくは、相手の立場と気持ちを考えて行動していきたいと思います。

「言葉の大切さについて思うこと」

治田小学校　六年　山本彩愛

私には、大切な友達がたくさんいます。また、友達に対して「思いやり」のあるやさしい人になりたいと思っています。人にやさしくして、みんなから「やさしいね。」と言われる人になりたいです。でも私はイライラして大切な友達に言ってはいけない言葉を使いけんかになる時があります。そんな時は、いつも後悔しています。

言葉の力はとても大きいと思います。人をはげまして、元気にする力と、使い方をまちがえると、矢のように人の心をきずつけてしまうおそろしい力があります。

私は、ハンドボールのチームに入っています。ハンドボールはチームワークが必要です。「がんばろう。」「ドンマイ。」「だいじょうぶ。」というかけ声でみんなとコミュニケーションを取っています。味方を思いやり、信用していれば元気になる言葉で「次はがんばろう」と思えて、良いパスができたり、味方を守ったり、良いシュートができたりします。だから、試合に勝つこともできるのです。逆に、味方が失敗をした時に、「バカ」「下手」「ドジ」と人を責めて、きたない言葉を使ったり、言葉の使い方を間違えるとコミュニケーションが取れなくなります。チーム全体が悪いふん囲気になり、話をしなくなり、試合に負けてしまいます。

私は、今年の夏の試合で言葉の力を体験しました。負けてるばかりの多いチームは元気がなくてテンションが低く感じられました。試合が始まりました。みんな声が出なくて、みんな緊張していて、一試合目は負けてしまいました。二試合目の試合はみんなで声をかけたり、カバーし合いました。試合には負けてしまいましたが、最初の試合よりは誰かが失敗しても、「ドンマイ、点を取り返そう。」とおたがいに声をかけ合って、はげますことができました。残念ながら一勝もできなかったけれど、最後まで、あきらめず、おたがい意見を言い合いみんなが一人一人を思いやりながら、がんばることができました。

時々、テレビやインターネットで、ニュースを見ていると、学校のいじめが原因で自殺した悲しいニュースがありました。小学生が言葉によるいじめが原因で学校に行くのがいやになったそうです。その小学生はいやな言葉を言われてすごく悲しくて、学校に行きたくなくなってしまったのだと思います。ぼう力には、言葉のぼう力と体を傷つけるぼう力があると思いました。だから、相手の気持ちを考えずに、みんなで傷つける言葉を言うこともぼう力です。ハンドボールで失敗した友達がいても、シュートが入らなくても、しつこく言うと言葉のぼう力に

なって人を傷つけてしまうから、やさしく、「大丈夫、気にすることないよ。次、がんばろう。」と言いたいです。私はみんなに「やさしいね。」と言われるように、言葉の元気をあげたいです。

いじめや差別について

戸倉小学校　六年　加藤優依

いじめは、人として許されないことだと思うから私はいじめに反対です。

人はみな平等に接するべきだと思います。人には「平等権」という生まれながらにもっている権利があります。私は初めて人権の意味を知りました。「人権」とは「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」あるいは「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持つ権利」です。

いじめは誰も大切にはできません。そして、「人」として許されてはならないことだと思います。

私のクラスでは学期がかわるごとに席がえがあります。やり方はあみだです。最初に視力の関係で前の席でないと見えない人が決めます。次にどこの場所でないと授業に集中できないという事情をもっている人が先生と相談をしてきめます。最後に残っている人が決めます。そしてその結果を先生が黒板に書いていき、「この人とこの人が近くにいたら問題がおこりそう。」といった人をクラスの人達と話し合って決めていきます。その中で「〇〇さんとはヤダ！」などと聞こえてくることがあります。それが一番私にとっていやなことです。視力の関係は仕方ないと思います。また、（ぼく・私はこの席でないと授業に集中できない）もいいと思っています。なぜならほかの所に行って人のめいわくになってしまうのもいやですし、他の人の環境も保てて自分の環境も保てるならいいんじゃないかなと思います。ですが「〇〇さんとはヤダ！」などという発言がありました。私はそれをきいて気持ちよくないと思いました。それは人権にも関わることですし、差別にもつながると思います。そう言われた人はたとえ表では笑っていたとしても裏では泣いているかもしれない、悲しんでいるかも、傷ついているかもしれません。たとえ表の表情が分かっても裏の表情・心の中までは分かりません。なので自分が言われて「いやだな。」、「悲しいな。」と思うことは言わない。でも中にはこんなことを言う人がいます。「私、ぼくは別に言われても悲しくない。傷つかない。」このような人は相手の事を考えることができない、思いやりのない人だと私は感じてしまいます。それは悲しいことで

もあります…。

なので相手のことを思い、考え、発言することが大切だと感じます。思いやりを忘れずみんな仲良く平等に接して、笑顔でいることが大切だと感じています。私も苦手だなと思う人はいます。でもさけたりするのではなく、話しかけられたら話して自分から行かない・関わらないというのはどうでしょう？そうすれば差別なんてことはおこらないと思います。もしも身の回りで、差別やいじめに関係することがあればその人たちの事情をきくなどとして、「いじめ・差別」のない世の中にしていくためにみんなで協力しあい意見を出してどのようにすればよいか・（解決できるか）を考え、解決をするきっかけにつながっていけたらいいなと思っています。

誰もが平等にそして自分らしく

戸倉小学校　六年　小林日榎

今、世界中でジェンダーレスについて話題となっています。そして、ＳＤＧｓの目標の中で「ジャンダー平等を実現しよう」というのもあります。私は、一人一人の考えを尊重することはとても大切なことだと思います。でも、実際にジェンダー平等やジェンダーレスな社会に変化していっているのか、私は疑問を持つことがあります。もちろん変わっていることもありますが、まだ変われるところもあると思います。

例えば、トイレのマークで、女性用トイレのマークは『赤色』、男性用トイレのマークは『青色』と決まっているトイレがある場所もあります。マークの色は、男女どちらも同じ色にしてもよいと私は思います。

他にも、昨年の参観日のとき、平等についての授業がありました。その中で、「校長先生は男の人の方が女の人より多い」ということについて「良い（だめではないと思う）」か「良くない」かを話し合う時間がありました。私は、「平等ではないのは良くない」と思い、「良くない」と答えました。そして、事前にとったアンケート結果を先生が見せてくれました。すると、「良くない」と答えた人は、三～五人しかいなくて他の人は「良い」と答えていておどろきました。私の小学校の歴代校長先生は百五十年の間に女性の校長先生は二人しかいませんでした。これらのことから、不平等をなくすために、平等なのか不平等なのかが理解できるようにし、女性も校長先生になれるような社会にしていかないといけないと私は思いました。

また、女性の国会議員数は日本ではとても少ないという問題もあります。海外の政治では、大統領が女性の国があります。そのため、女性が大統領の国は、男性と女性の両方の意見や考

えが出ます。一方、日本では女性の議員が海外に比べてとても少ないので、国民の女性の考えが政治に反映されにくくなってしまいます。女性と男性の両方の国会議員数がちょうどよいバランスの人数で政治が行われると、不平等ではなくなると思います。

ジェンダーレスの社会に合わせて、今、日本の学校のせい服を、女性はスカートとリボン、男性はズボンとネクタイと決めずに、好きなものを選べる学校が増えています。「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく」と決めず、一人一人の考えを大切にするという取り組みをしていることは、変化の一つだと私は思いました。

今の日本では、ジェンダーの平等、ジェンダーレスについて、解決していない問題や、不平等なことは少なくないと思います。でも、少しずつ変化していることや、解決に向かっていることもあります。「女の子らしく、男の子らしく」ではなく、一人一人の個性や、考えを尊重して、誰もが自由に、平等な社会を目指し、私にもできることは取り組んでいきたいと思います。

❖中学生の部❖

最優秀作品

人権学習を通して学んだこと

屋代中学校　三年　土屋奈緒

私は、中学校の三年間に学んだ人権学習を通して、差別は絶対にあってはいけないものだということを強く思いました。なぜなら、差別される側になった人は、差別する側の人が想像できないほどの苦しみを感じながら生活しているということを実感したからです。

人権学習では、まず、部落差別について学習しました。部落差別とは、ある特定の地域で生まれたり、その地域で生活したりしているだけで、他の人から差別を受けてしまうという問題のことです。特に、結婚の時には、部落差別が表面化することがあります。結婚を考えていても、「相手の人が被差別部落出身だから」という理由で結婚を断ってしまったり、親や親戚から反対されて、結婚をやめさせられたりすることがあるという

ことを知りました。親が自分の子どものためと思って結婚に反対したとしても、これはすべて部落差別にあたります。この問題で特に印象に残っているのは、差別に苦しむ家族の思いです。部落差別は代々、世代を超えて続いてしまうことがあるということを知り、とてもせつなくなりました。このままでは、将来も苦しい思いをする人が増え続けることになります。今の私たちが正しい知識をもって、まずは偏見をなくしていくことが大事なのではないかと考えました。

次に、ハンセン病による差別問題についてです。当時、ハンセン病はとても恐ろしい病気だと考えられていました。ハンセン病と診断されると、医師らが警察官とともに患者のもとを訪れ、療養所に送り込まれ、自由が奪われた環境で過ごさなければならず、さらに、感染者の家族までもが厳しい差別を受けるという辛い状況になってしまいました。かつて、感染症によるこんなひどい差別があったと考えると、本当に恐ろしいです。部落差別問題とは、また違った視点から、人権について深く考えることができました。

部落差別問題、ハンセン病による差別問題は、どちらも人権問題の一つです。人権学習をするまでの私は、どちらもよく知りませんでした。ですが、この三年間で様々な人権問題を知り、考えたことで、他人事として捉えてはいけないということを強く感じました。今の私にできることは多くないかもしれないけれど、差別による人権問題を理解し、間違った情報ではなく、正しい情報を伝えていくことが、問題の解決につながっていくと思います。

また、この二つの差別だけでなく、今の世の中には、なくさなければならない差別が数多くあることも知るべきです。性別によるジェンダー差別、生まれた国や肌の色の違いによる人権差別などはよく耳にする差別問題の代表的な例です。これらの差別も、部落差別やハンセン病による差別と同じように、原因は人々の偏見や誤解によって起こっています。私が一番大切だと思うのは、「相手の立場に立って考える」ということです。みんなが思いやりをもって、一つひとつの言葉に対して責任をもつことで、傷ついたり、悲しんだりする人もいなくなるはずです。

中学校での人権学習を通して、大切なことをたくさん学びました。これから生きていくなかで、これまでの学びを常に意識していこうと思います。この世界に生きるすべての人々、誰もが同じ一人の人間です。全員が同じ立場で、尊重し合えるような世界になってほしいです。

優秀作品

三年間の人権学習を通して

屋代中学校　三年　佐藤胡桃

私は、三年間の人権学習で、たくさんのことを学び、考えてきました。

一学年では、部落差別についての学習で、「えた、ひにん」という言葉を知りました。このとき、優れた能力をもっている人たちを、どうして差別するのだろうという疑問をもちました。なぜなら、他の人たちができないような技術をもち、時には、命をかけて責任を果たしている人々を、尊敬せず、差別してしまうというのは、おかしなことだと思ったからです。

三学年では、前期の人権学習月間で「ハンセン病患者に対する差別」について学びました。明治時代に流行したハンセン病（当時は、ライ病とよばれていました）によって、たくさんの人が差別の対象になりました。当時は、原因など、よくわからない病気だったので、「ハンセン病は、感染力が強い」、「近寄っては、いけない、隔離しなければ」等の噂が広まってしまいました。小さい子どもが感染した場合は、親と離されてしまい、もう会うこともできなくなり、その家族も差別の対象になってしまいました。しかし、ハンセン病療養所に勤務していた人が感染したという事例はなかったということです。もし、本当に感染力が強かったとしたら、療養所の人たちも感染していたことでしょう。この学習を通して、事実をしっかり見て、正しく判断することが大切だということを感じました。

三学年の後期人権学習月間では、部落差別についてさらに学習を深めました。まだ、この差別が根強く存在していることを知り、驚きました。住んでいる場所によって、何が違うのか疑問をもちました。実際は何も違いはありません。「その地域に住んでいる」、「その地域の出身である」というだけで、差別の対象になるのはおかしいと思いました。結婚差別についても学習しましたが、これもおかしなことです。身元調査をすることは差別につながります。まして、「被差別部落出身だから結婚には反対」というこんな差別は、どうしても理解できません。もちろん、こんな差別には私は反対です。差別している人は、人の中身や人柄で判断するのではなく、偏見や世間体にとらわれているのです。本当に怒りがこみ上げてきます。学習したことを、父とも話し合ってみました。父は、「こうした差別について、あまり学習していない人たちもいるかもしれない。」と言っていました。私は、しっかり学習して、正しい知識をもっ

ていることが大切だなと感じました。

三年間の人権学習を通して、私は、すべてに関して正しい知識をもっておくことが大切であり、中学生のころから学習を積み重ねていくことが重要だと思いました。もし、身近に差別するような人がいたら、「どうして差別するの？」「何か理由があるの？」と聞いてみたり、学習したことを活かして「差別なんてやめなよ」と教えてあげたりできるようにしたいです。

誰もが生きやすい社会の実現に向けて

更埴西中学校　三年　鈴木翔太

「人権」とは歴史の中で様々な変化を遂げ、その意味や意義はより深いものになってきています。近年、話題となることが多いＳＤＧｓについても、三学年の総合的な学習の中で学び、人権にかかわる事柄が多くあることを知りました。また、この更埴西中学校でも来年度からジェンダーレス制服が採用され、人権への理解や配慮といった面で、身近なところでも変化が起きています。

ＳＤＧｓの学習の中で、世界の六歳から十一歳の子どものうち、女の子は男の子の二倍も一生学校に通えずに暮らしていることを知りました。私たちは毎日、当たり前のように机に向かい、教育を受け、給食も食べてほぼ全員が高校に進学します。望む、望まないにかかわらず「学ぶ権利」を日々行使しているのです。しかし、世界には最も基本的な権利である「生きる権利」を全うすることで精一杯で、学校に通うことすらもままならない人々もいるのです。今年度の生徒会で行ったスマイル旬間、ベルマーク収集、牛乳パック収集などは、中学生の立場として彼らを救える可能性のある活動だったのだと気づきました。

他にも、世界の女性議員の数は議員全体の二十五パーセント、日本の女性議員は十パーセントにも満たないそうです。だから、女性議員が内閣に入ると男性議員よりもニュースとして取り上げられるのです。また、こうした男性、女性の枠組みだけでなくＬＧＢＴＱといった幅広い「性」も広く認知されるようになってきています。今、世界は多くの権利に関する問題があると同時に、多くの新たな権利を生み出し続けています。それは、社会的少数、つまりマイノリティにとって生きやすい社会に近づいているということかもしれません。

では、マイノリティが生きやすい社会とは、どのような社会なのでしょうか。ものすごく優遇されたり、周りから特別な目で見られ大切にされたりすることでしょうか。私は、マイノリティが特別に扱われるのではなく、お互いの価値観を認め合

い、お互いの権利を尊重し合うことのできる社会だと考えます。

たしかに、障がいをもつ方々が、健常者と同じ仕事をするのは難しいこともあるかもしれません。しかし、それらの違いを、目の色や肌の色が違うのと同じような違いとして受け止められれば、その人にしかできない仕事もあると考えることができるかもしれません。

義務教育最終年、これまでいじめや差別など人権を侵害されることについて多くを学んできましたが、改めて人権について考えてみると、人権の新たな歴史を創るのは私たち自身の考え方や行動の仕方だと感じました。お互いをより良く知り、お互いの価値観や文化に触れることで新たな価値が生まれます。

誰もが生きやすい社会の実現のために、まずは私たちが、私自身が、行動していくことが大切だと思います。

ハンセン病と正しい知識

更埴西中学校　二年　下　嵜　彩　音

みなさんはハンセン病という病気を知っていますか。ハンセン病とは、らい菌によって起こる慢性の感染症で、感染すると、顔面や手足の末端が麻痺したり、皮膚に斑紋が現れたりする病気です。今では完全に治る病気になりましたが、実はハンセン病には悲しい歴史がたくさんあったのです。

私は人権教育の学習の中で、ハンセン病のつらい歴史を知り、とても驚きました。ハンセン病患者やその家族は差別の対象にされてきたのです。ハンセン病患者は、遠く離れた島や隔離された施設へ追いやられ、そこで生涯を過ごすことを余儀なくされました。みなさんはこのことを知ってどんなことを考えましたか。私は、こんなことはもうあってはならないことだと感じました。でも、今もなお、ハンセン病だった人や家族に対する偏見や差別が残っています。これらが無くならないのは、間違った知識を身につけてしまっている人が多いからです。

今の時代は、インターネットなどで簡単に情報を入手できます。これは便利なことですが、間違った情報が紛れこんでいることもあります。間違った知識を身につけ、それが原因で差別や偏見につながっていってしまうこともあるのではないでしょうか。だからこそ、間違った知識による偏見や差別をなくしていくためには、自分が身につけている知識が正しいものなのかを見分けていくことが大事なのだと思います。また、偏見や差別を知らないでいることや関心をもたないでいることも問題なのだと感じました。差別に対して正しい知識を身につけたり、関心をもったりすることが差別を減らしていくことにつながり

ます。私も、差別をなくすために、差別に関心をもち、正しく学んでいきたいです。

中学生最後の人権の授業

戸倉上山田中学校　三年　瀬　在　優　菜

「ＬＧＢＴＱ」とは「ＬＧＢＴ」の派生形で、「レズビアン」「ゲイ」「バイセクシュアル」「トランスジェンダー」「クエスチョニング」の頭文字を取ったものです。現在、世界各国では、「ＬＧＢＴＱ」に対する法律がつくられています。また、日本の各国大使館では権利の促進・支援の取り組みが行われています。少し前だったら当たり前ではなかった「ＬＧＢＴＱ」が、今では約八十パーセントの人が認知していると言われています。それもそのはずで、日本の「ＬＧＢＴＱ」の方の割合は約八・九パーセントで十人に一人の割合になります。この状況と日本の対応について、中学校最後の人権の授業で教わりました。その中でも印象的だったのが、「トランスジェンダー」の西原さつきさんの講演会でした。

西原さんは、過去の自分のように性別の違和感を感じている人に対して相談に乗ってあげたり、乙女塾の代表を務め、運営もしています。そんな方から実際の体験や思いを聞くことが出来て、より「ＬＧＢＴＱ」のことを理解出来たし、今まで見ることの出来なかった新しい視点から「ＬＧＢＴＱ」を見れたことが自分にとって大きく心を揺さ振られたのかなと思います。また、西原さんの話の内容や、授業で取り扱った教材に出演している方の話からも、やはりカミングアウトするにはすごい勇気のいることだと改めて思いました。

私達が生きているこの瞬間は、まだ人生の序章にすぎません。これからの人生の中で、社会に溶け込めば溶け込むほど、お互いの中身は分からなくなっていきます。普段の生活の中で、カミングアウトを友達や仕事の同僚がしてくる可能性は〇とは言えません。だからこそ、カミングアウトをして来たら、いかに重く捉えずに、その事実を受け取ってあげられるか。私は相手にとって今後の生活で頼りやすい存在になってあげたいです。

佳作作品

一周回って、単純に

屋代中学校　二年　松澤福実

「差別」という言葉、今の私たちは「ああ、差別ね。なくしていきたいよね」…で終わりになっている気がする、と感じます。

ちなみに、私も人権学習をしてきて、何度も何度も、「差別がない世の中だったらいい」「これから差別をなくせるようにしていきたい」と感想用紙に記入してきました。だけど、最近すごく思うのが、「口先だけ」ということ。いくら文字だけで自分の思いをつづっても、口に出して「なくせたらいい」と言ってみても、行動に移さなきゃ何の意味もありません。

中学校で部落差別の学習をして、かつて、部落差別をなくすために実際に行動に移した人がいて、また、その人に啓発され、「部落差別は、なくさなければならない」という意識をもつ人々多くなり、差別をなくす運動が進んできた、という事実に驚かされました。

学校生活をみていても思いますが、誰かと一緒にやらないといやだとか、誰かと一緒ならできるとか、みたいに、なかなか一人では行動に移せず、自立した意識をもつ人が少ないと感じます。でも、「これはおかしい」という考えから、独りで立ちあがり、「部落差別はだめなこと」という訴えの発起人となり、そこから共同し、世の中を動かしていった人々を私は尊敬します。

でも、だからといって、自分は何か行動できるか、といわれると、そう多くは思いつきません。私たち中学生が、世間を動かしたり、「差別をなくそう！」という考えを大きく世の中に出したりすることは、ほぼ不可能です。ですが、その〝ほぼ不可能〟という言葉の、〝ほぼ〟の部分には、まだ希望が残っていることを意味しています。では、私たちは、何ができるかというと、〝普通に生活していればいい〟のです。普通に生活していたら、いじめや差別は起こらないはずです。普通に生活していくなかで不満が募るのならば、それを陰での悪口や暴力的な差別に移すのではなく、はっきり自分の言いたいことを言えばいいのです。「それは、ちがくない？」、「おかしいと思うよ」、「あなたのしていることは間違っているよ」と口にだせばいいのです。

人権学習をしてきて、いろんな人の体験や意見を聞き、いろんな自分の考えと向き合い、考えて、一周回って、すごく簡単なことなんだと気がつきました。

普通に生活する。これが人々にとって、いちばん平等であり、いちばん簡単に差別をなくす、いや、差別をしなくなる方法だと。あくまで私の考えですが、このように「単純なことだったんだ」と気づいてくれる人が絶対いる、私のこのような考え方に共感してくれる人が絶対いる、と願っています。この私の考えは、世の中にバンッと出すものではなく、身近の人同士で広めていけば、いつかはきっと全世界の人々に響くものになると思います。

私たちは、まだ十四歳、私たちは、まだ中学生。これをうまく利用して、若い脳をもつ私たちより下の世代にも伝えていく、そして親へも、そこからどんどん広がっていき、いつかはみんなが普通に生活できる、息苦しくない世の中になっていけば、「ああ、差別ね。なくしていきたいよね」。この言葉が、とても意味を成すものになると思います。

道徳の授業で学んだ人権問題

更埴西中学校　一年　中里莉菜

私は、道徳の授業でさまざまな人権問題を学びました。その中でも、特に印象に残った人権問題は、目の色の違いで差別がおこる、人権問題です。

私は、道徳の授業で、「青い目、茶色い目」という、動画を見ました。この動画は、とても古いもので、アメリカのある学校で行われた、生徒たちを目の色の違いで差別をする、差別実験の動画です。この差別実験の内容は、生徒を、青い目の人と茶色い目の人に分け、どちらの色の目の人も、差別される立場におかれ、立場が変わった時の生徒の心情や様子の変化を調べるものです。

まず、青い目の色の人がみんな良い子で、茶色い目の人がみんな悪い子という設定で実験します。青い目の色の人たちは、先生に出された問題を、茶色い目の人たちよりも早く、クリアすることができました。また、みんな悪い子と言われた、茶色い目の色の人たちは、先生に出された問題を、青い目の色の人たちよりも、早くクリアすることができていませんでした。さらに、茶色い目の人が良い子、青い目の人が悪い子という、立場が逆になった設定で、実験を進めました。すると、先生の出した問題を青い目の人は、茶色い目の人よりも早くクリアすることができていませんでした。

このようなことから、生徒の力や心情が大きく変化するのは、周りに言われたことが関係し、それが、差別につながっていると、私は感じました。差別をする側は、軽い気持ちでやっていて、心に傷を負うことはありません。でも、差別された側

は、心に深く傷を負い、一生忘れることができないのだと思います。

しかし、現在でも世の中から差別はなくなりません。それは、差別する側は、差別される側の気持ちが理解できず、色々な人を認めることもできないからだと思います。また、差別は遠い存在にあり、自分にはあまり関係ないと思っている人も多いのではないでしょうか。だから、人と人が認め合い、差別は身近にある近い存在だと理解することが、差別をなくすための第一歩だと思います。私はそのことを頭に入れ、日頃の生活をおくっていきたいと思います。

さまざまな人がいる世の中を理解する

戸倉上山田中学校　三年　伊藤笑愛

私は差別やいじめを受け救われず亡くなってしまう人の話を聞くとすごく胸がいたみます。やられたくないことをされて、なぜその人が命をおとさなくてはいけないのだろうと思いました。

私は先日、西原さつきさんの講演を聴いてあらためてＬＧＢＴＱについて考えてみました。まず講演を聴いて私はＬＧＢＴＱである方々の考えが大きく変化しました。最初はなんで男性同士・女性同士で好きになったり、女性が男性、男性が女性になりたいと思うのはなぜだろうと思っていました。しかし、私はこの疑問をそういう人もいるんだと理解する心をもつことの方が大事なんだと気づくことができました。ＬＧＢＴＱの人たちは親や親友にも言いにくいことをかかえてずっと苦しい生活をしてきていたのに、私はなんでこんな考えをもってしまったのだろうかと少し反省しました。私も最初はなんでこんな人たちがいるのだろうと疑問をもっていた側の人間ですが、考え方を変えることでＬＧＢＴＱの人が一人でも多く楽しい生活ができるのだとわかることができました。

人権学習を通して、ＬＧＢＴＱの方々について改めて考え直すことができたと思います。世の中にはさまざまな人がいて、人によって、この人といっしょにいたくないや、気持ちわるいなどと感じるときがあるかもしれませんが、その気持を決していじめとなるような行動をしないことが一番大事です。人権学習中の授業でみた、結婚をした後も差別について気にしながら生活していかなくてはいけない人がいることに私はおどろきましたが、その動画に出ていた人たちは、意外にも笑っていました。本当は苦しいことのほうがいっぱいだと思うのに、支え合っているんだなと感じました。私も苦しんでいるような人には手を差しのべられるような人になったり、もし知り合いでＬＧ

ＢＴＱにあてはまる子がいるのならいつでも理解してあげられる心をそなえておきたいです。

「人権学習を通して学んだ事について」

戸倉上山田中学校　三年　佐藤　絢菜

私は人権学習をこれまで行ってきて深く学んだことや実感したことがいくつかあります。

一つ目はＬＧＢＴＱやトランスジェンダーのことについてです。最近、新聞などで性に関する事が上げられています。私はそういう人達が世間から認められていなくて性の区別だけで人を差別されている人が身近にいることにとても驚きました。周りの人と違うと言いずらいこともあります。でも、自分自身の根底にある本当の気持ちを信頼できる人に相談したり、打ち明けたりすることは人生を生きていく中で安心感をもたせてくれると思います。そのために、私達はその人達の気持ちに寄り添って共に考えてあげることが大事だと学びました。十一月に行われた講演会で西原さんが言っていたことはとても印象深かったです。「性を変えることはとても勇気のいることで悩んだり、迷ったりすることが多いけれど、性を変えたことで感じ方や見方が変わった」とおっしゃっていました。色覚や趣味など、本当に様々でした。中学から高校、大人になるまでの西原さんの人生を大勢の前で隠し事もせずに語ってくださったことはすごい事だなと実感しました。これから生きていく中で人を偏見で判断しないように、ささいな言動にも気を配ってあげたいです。

二つ目は被差別部落出身の人に関わることについてです。人権学習でビデオを見た時に自分が選択をしていく人生なのに何か心の中にいつもつきまとうものがあることはすごく嫌だなと思いました。結婚するにしても、子供ができても…。被差別部落出身というだけで人を見ないでほしいです。その人にも良い所や性格があるはずです。私達は出身や身分だけをうのみにしてしまいます。悪い所を言えば自分も相手も傷ついてしまうので多少の違いでも受け入れられる人でいたいです。また、出身を隠して生きていくのはとてもつらいことだなと思ったし、被差別部落出身ではない人達もその人達の事を気づかい、思いやることがお互いの生活を成り立たせるのにとても大切なことだなと思いました。まだ被差別部落出身で差別されているひとがいるかもしれません。この世の中に生まれてきた以上はその人が生きる権利を持っていて、自分勝手な行動をしてはいけないことを改めて学びました。将来、〇〇出身や〇〇人など色んな人に出会う機会があると思います。その時、表面上で相手を判

断するのではなく、他にその人の良い所やその人にしかないものを自分自身が会話をしていく中で見つけ出せるようになりたいです。そして、それを相手に伝えることができれば社会の差別や偏見はなくなっていくのではないかと考えました。

私はこれまでの人権学習を通して色々な性や世の中の多様な差別が見えないところにあることを知り、私も周りの人の気持ちを理解したり、相手の立場に立って行動することを心がけたいです。

人権学習を通して

戸倉上山田中学校　三年　吉松　佑紀乃

今回の人権学習を通して、私は部落差別とＬＧＢＴＱについて学びました。

部落差別の学習では、とある夫婦の実話をもとに、自分の考えを広げました。妻であるよしこさんは、被差別部落出身である夫つよしさんと結婚をするために、家族との縁を切りました。当時は今ほど部落について理解をしてくれる人はおらず、よしこさんの両親もつよしさんの出身を知って、結婚を反対しました。また、二人の子である美穂さんも、一年半付き合っていた彼氏がいましたが自分の出身を言い出せずに、そのまま別れてしまいました。誰かと結婚をするために、家族との縁を切ったり、大切な人と一緒にいるために、隠し事をしなくてはならなかったりする世の中は、変わるべきだと思います。現在は昔より差別意識が低くなってきていますが、偏見が完全になくなった訳ではないと思います。差別はされていない人からすると、あまり重い問題には感じないけれど、受けている人にとってはとても重く、乗り越えにくいことだということを、この学習で再び感じました。また、相手からカミングアウトされたときも、いままでと態度を変えて特別に接するのは逆に相手を傷つけてしまうのではないかという意見が出ました。カミングアウトをすることはとても勇気がいることなので、相手の気持ちに答えられるようにしたいです。

また、ＬＧＢＴＱの学習では、講師の西原さつきさんのお話をききました。日本には、性別について悩んでいる人が約十人に一人、トランスジェンダーの人が百人に一人いる、ということをききました。ＬＧＢＴＱの人がいる割合は、左利きの人やＡＢ型の人の割合と同じだそうです。今では身近なところにもそのような人がいます。西原さんは、

「性には様々な組み合わせがあり、『心の性』『体の性』、『好きになる性』、『表現の性』の組み合わせは人それぞれ異なります。自分らしく生きることが大切です。」とおっしゃっていま

した。このことを聞いて、組み合わせが違うだけで、特別なものだと思うのはいけないなと思いました。また、周りに合わせて生きるのではなく、自分の人生を自分のやりたいことをして生きたいなと思いました。

これらの二つの学習を通して、相手の気持ちを考えることが大切だということが分かりました。また、相手だけでなく、自分の気持ちも大切にしていきたいです。差別、偏見なく過ごすことができる世界をつくるために、困っている人の相談にのるなど、今回の学習をもとに自分にできることをしていきたいです。

かがやき

－令和４年度　差別の解消をめざすことをテーマとした人権作品集－

発行年月　令和５年３月
発　　行　千曲市・千曲市教育委員会
編　　集　千曲市　健康福祉部　人権・男女共同参画課
〒３８７－８５１１　長野県千曲市杭瀬下二丁目１番地
TEL　０２６（２７３）１１１１
FAX　０２６（２７３）１９２４
E-mail：jinken@city.chikuma.lg.jp